失われた地からの転生者

アビス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
失われた地からの転生者

【Ｎコード】
Ｎ２５５９ＢＡ

【作者名】
アビス

【あらすじ】
優れた技術があったら誰もが欲しがるだろう。だが、進み過ぎた技術は破滅を招く。
そんな出来事を体験した転生者とマテリアルの物語

プロローグ（前書き）

まさかのもう一つ連載～・・・・・・・はっきり言って更新が遅くなる。

だが後悔はしてない。

プロローグ

俺は転生者、まあテンプレよろしくってやつだ。気が付いたら転生ってやつだ。

リリカルなのはに転生した時は、胸がはじけるほど喜んださ。

最初の頃はな。

魔法を使って色んな事をしまくろうぜ！・・・な～んて思ってた自分がバカバカしかった。

魔法は兵器、所詮ただの人殺しの道具さ。魔法で殺しあって殺しあって、最後には何もかも無くなっちまった・・・・。まあ魔法だけじゃないんだけどな。質量兵器に、色々。物騒なもんで殺しあった。

大切なもんをたくさん失った。

友人も、家族も。

けど、ここで立ち止まるわけにはいけねぇ・・・・。

前を向いて生きていかなきゃならねえんだ。

ま、とりあえず前世の故郷である地球に行くとしますかね。

管理局？なにそれおいしいの？

俺は俺のしたいように生きる。

原作キャラがどうなろうが構いやしねぇ、俺ァ平凡に暮らすとしますかね。

何て気楽に海鳴市に来るんじゃなかったぜ・・・。

何故かって？いや目の前に・・・・・・

「おお？どこだ？ここ？」

「どこでしょう・・・？」

「・・・ん？おいそこの塵芥、貴様何者だ！」

マテリアルがいるんだよ！

あれ？Ａ，ｓ編からもう４年くらい経ってるはず！？

何でだ！？っていうかよくよく考えたら俺原作全然しらねえじゃん！

マテリアルくらいしか・・・・あれ何か記憶があやふや・・・・・・・。

プロローグ（後書き）

マテリアルの口調ってこんなんでいいかな？

指摘とかしてくれるとうれしいです。

後、残念ですがプレシアはこの小説では出ませ～ん。

家族が増えた（前書き）

第二部投下～

家族が増えた

さてさて、色々飛ばし過ぎたので地球に来てからのこと話説明しよう。

まず、海鳴市に来て戸籍を偽造してちょっときたな～い方法で金を稼いだ後家を買いーの仕事をしーの・・・まあ、色々。で、買い物し終わった後、緑色の結晶？みたいなものを拾って持ち帰ったら急に光り出してー・・・はっ！もしかしてこれが原因！？・・・・・・・夕飯は何にしようかなー。

・・・・・・え？何？現実逃避はそこまでにしておけ？ナンノコトカサッパリダナァ？

「おい！聞いておるのか！塵芥！」

ハァ・・・・・・やはり現実はみないと。なんかどこぞの新世紀の

某主人公のセリフが頭によぎるが気のせいだろう。

「俺の名前はルイン・A・ヴァール・・・・・・・長いからルイでいい・・・・・」

内心、ため息がとまらない。面倒だ、ああ面倒だ、面倒だ。あ・・・・五七五になってる・・・。

にしても・・・・・・はて？体がA'sの時より成長してるような・・・・・・きのせいか。っていうかA'sの時ってどうだったっけ・・・・・・いかん、完璧に忘れてる。あれ？そーいえば管り・・・・覚えてねえ！何かどでかい組織があったはず・・・・ま、いっか。

「おお！何かかっこよくて強そうな名前だな！」

水色の髪をしたツインテールの奴がそう言うが、俺的にはこんな厨二臭い名前はどうかと思ってるんだが。

「黙っておれ！レヴィ！」

ヤマンバみたいな髪の色をしている偉そうな態度をしている奴が怒鳴る。レヴィと言う方はブーブー文句言っているみたいだが・・・・。

「・・・・・ちょっといいかな？」

「何でしょうか」

とりあえず俺は物静かで栗色の髪をした方に話しかけた。

「よく分からないから今の状況を把握したいからあんた達の事聞かせてもらってかまわないかな？」

栗色の髪をした女の子はしばらく考えた後頷き、ほかの二人と何やらぺちゃくちゃ話し始めた。

すると、ヤマンバみたいな髪の色をしてる方がこちらの方を向き、

「よかろう。我らについて話してやる代わりに貴様の事も聞かせてもらうぞ」

と、腕を組みながら偉そうな態度をする。んー・・・・・いかんな何もかも忘れてるな、ま、いっか。

「よーするに、お前さんたちは闇の書の残滓で、その・・・なねは？達の元になったマテリアルで、うんでもってそいつらにぼこられた、と」

「何か釈然としませんがそういうことです」

あの後、色々話しを聞いた。自分達は闇の～とか、マテリアル～とか。うん全部忘れてるな、原作。タイトル名しか覚えてねえｏｒｚ

「で、貴様は何者だ」

腕を組みながらこちらの方を見るディアーチェ、何者ってえーっと、

「・・・・・魔導師？・・・たぶん」

うん自分でも結構曖昧なんだよ。うーん刀振り回して、魔法使って、技術もある・・・・・これ魔導師？

「多分とは何だ！貴様ふざけているのか！」

あ、やべ、怒らせちまった。

「いやたぶｎ『マスター、解析終了しました』・・・・・そ、そ

うか」

自分のデバイス、ルシファーに緑色の結晶について調べてもらってたんだけど・・・もーちょい空気読んでほしいなー・・・・・・ハア。関係ないんだけどデバイスの名前も厨二臭い。もっとマシなの付けてほしかったなー。

「なにを解析していたのですか？」

シュテルとかいう女の子がこちらに尋ねる。

ルシファー、説明お願い。

『マスターが拾った緑色の結晶はロストロギア『記憶復元（メモリーレストレーション）』でした。これはプログラムなどを取り込み、それを復元する機能を持つロストロギアでした。しかし復元するには魔力が必要であり第三者が魔力を送らない限り復元することは不可能です。つまり彼女達が消滅する寸前でロストロギアが彼女たちを取り込み、復活したのはマスターが無意識に魔力を送ったか、ロストロギアがマスターの魔力を吸収した、ということでしょう』

・・・・・え？つまり俺のせい？

「？うーよく分かんないー」

何の話か分からないようなのか、首をかしげるレヴィ。

「今の話を聞いて分からぬのかこのド阿呆めが」

「アホじゃないもん！僕は凄いからアホな振りしてるだけだもん！」

ぎゃあぎゃあとディアーチェのアホ発言を否定するレヴィだが・・・・・・何とも言い難いなー。

「つまり我らが復活できたのはロストロギアとそこにいる下郎のおかげということだ」

うん、簡潔に分かりやすく言ったね。・・・・・・って助けた人を下郎扱い！？

「おお！そうなのか！」

そういって笑顔でこちらの方を向くレヴィ。

「ありがとう！君ってすごくて強くてかっこいいんだね！」

いや、偶々なんだけど・・・

「私たちが復活できたのはあなたのおかげです」

いやだから――――――

「ふん、貴様ごときの下郎に助けられたのは気に食わんが礼を言おう。ありがたく思え！」

――――――いいや、もう（泣）

「僕此処に住みたい！」

「ハイ？」

あれからしばらくしてレヴィがとんでもないことを言い始めた。

「だってここ凄くてかっこいいじゃん！」

ちなみにうちの家は木造式、どこぞの武家屋敷みたいな造りだ。あ、今いる所は和室ね。

「私は別に構いませんが……」

「我は反対だ！何故こんな貧相なとこで住まなければならんのだ！」

……貧相？

「これを見ても貧相と言えるのかな……」

「何？」

片眉をあげるディアーチェ。ルインは戸に手をかけ、思いっきり開けた。

スパァァァァァン！！

「おお！」

レヴィが感嘆の声を上げる。何故なら――――――――

「これを見て貧相と言えるかァァァーーー！！！」

家の庭はものすごく広ーい、おまけに庭はきれいにしてあるからそれはまた美しい。え？きれいにしてるの誰かって？……俺がんばったんぞ！言わせは！

「これはなかなか……」

「うむ……」

お二方も見入ってるようだ。もう貧相だとは言わせん、言わせわせ

「ね！ね！王様！此処に住もうよ！」

「ぬぐぐぐ……ふん、そこまで言うのならいいだろう！有り難く思え！塵芥！」

わーいわーいとはしゃぐレヴィと相変わらず無表情のシュテル。

ふう・・・・。これにて一件……

落着じゃねえ！っていうか俺の意見無視されてた！気づけよ俺！……ああ、もういいや。

こうして俺はマテリアル達と過ごすことになった。

やな予感しかしないが気のせいだ、気のせい、たぶん……

家族が増えた（後書き）

マッテ子大好き何が悪い（笑）

主人公設定

名前：ルイン・Ａ・ヴァール

魔力：Ｓ＋

魔力光：虹

容姿：髪の色は黒、目は黄色と青のオッドアイ（本人はあまり気に入ってないため、出かけるときはカラコンをしている）

魔力はとても高いが現在リンカーコアが、半壊状態のためあまりでかい魔法は使えない。

治癒魔法、転送魔法、防御魔法、重力魔法、等々多忙な魔法が使える。しかし前文で述べているようにでかいのは使えない。

デバイス：ルシファー

高性能のＡＩだがルインはあまり魔法を使わないため出番は少ない。

ちなみに技術力は某マッドサイエンティストよりもはるか上、けどあんまり活用しない。

主人公設定（後書き）

マテリアルの日常はどんなの書こうかな～

こたつ（前書き）

マテリアル可愛い

こたつ

「寒い」

「寒いですね」

「寒〜い」

「ええい、寒い！」

冬は寒いなー。と、言うわけで現在進行形でこたつに入ってまーす。
ちなみに全員羽織物着てる。あったかいよねこれ。

「あったかい〜♪」

「狭い！」

「ディアーチエ、我慢して下さい」

仲が良い（？）ことで。

こたつと言ったらやっぱりみかんでしょ。ど真ん中にドサッとな。

「♪～」

みかんをとって皮をきれーにむいて～

……ん？レヴィがこちらを……いや、むいたみかんを見てる。

食べたいのか？

「……食べるか？」

と、言ったら満面の笑顔を浮かべ

「いいの！？」

いや、まだ沢山あるし別に，ねえ。

俺は頷いてレヴィにみかんを渡した。

「あ～ん……パクッ」

レヴィは貰ったみかんの一切れを口に入れた。

……感想は？

「ムぐムぐムぐ……まずくない……決して不味くないぞ！」

……おいしいじゃなくて？

でもかわいいからいっか。

「ほら、お前らも食べな」

「では頂きます」

「我に命令するな塵芥」

むーディアーチェにはいつか名前で呼ばせてやる。ていうか塵芥やめて。

でも可愛いから許す。

シュテルは俺がむいたのを覚えていたのかきれいにむいた。……ディアーチエ、チラチラとシュテルが皮むいてるの見てる事くらい分かるって。でも何か心がキュンとする。

「おいしいですね」

そのわりには無表情だね。

「ふ、ふん！まあ、ましだな！」

たくさん食べても説得力無いよ。

「ムニャムニャ……」

こたつに頬杖をついて眠ってらっしゃるレヴィ、可愛い。

「スヤスヤ……」

シュテルは畳に寝っ転がって寝てる、可愛い。

「グー」

ディアーチェ、畳に涎たらさないで！でも可愛いから許す。

……あれ？何かおかしいような……気のせいか。

でも可愛い事は悪い事じゃない。

と、ディアーチェのほっぺをプニプニ突っついている俺は悪くない。

ピンポーン

……あっ詫急便だ。

出れるの俺しかいない。

寒いのやだな～……にしてもこんなに寒いと雪でも降りそうだな～

玄関に歩きながらそんな事を考えている。

小さくて白いものがチラホラ降ってることにも気付かずに……

こたつ（後書き）

マテリアルが可愛すぎて生きるのが辛い。

ちなみに主人公マテリアルのことが好きかも

マテリアル達の設定（前書き）

魔改造した。すこしだけど

でも後悔してない

それに殆んど戦わないし

マテリアル可愛いし

マテリアル達の設定

名前：シュテル・ヴァール

大体は原作通り

ルインが家にある道場で木刀を使って訓練しているのを見て、自分もしてみようと思い双刀を使いこなすようになった。

高町家の御神流とまではいかないがそこそこ強い。

デバイス：ルシフェリオン

これも同じく原作通り

ただルインの魔改造により双刀モードが追加された。

名前：レヴィ・ヴァール

これも同じく原作通り

何故か知らないが木刀を使って修行してる。（ルインの影響だが本人は知らない）

デバイス：バルニフィカス

これも原作通り

またしても魔改造だが刀と槍モードが追加されてる。

名前：ディアーチェ・ヴァール

原作通り

ただ他の二人が刀を使ってるの見て「我だけ仲間外れとはどういうことだ！」と、ルインに詰め寄り刀の技術を教えてもらってる。

デバイス：エルシニアクロイツ

これも原作通り

お約束の魔改造だが刀モードが追加されてる。

マテリアル達の設定（後書き）

侍好きで何が悪い（笑）

殆んど日常書きます。

釣りしたり、何をしたり……

雪かき

「わーい」
雪が積もってはしゃいでいるレヴィ。ふつーに可愛いんだが体型が中学生、高校生位なので何とも言えないが可愛いからよしとしよう。
でもまあ、こんなに雪が積もってたら屋根の雪を落とさなきゃ。
俺一人でやると物凄くかかるから、んー……シュテルは料理作ってるし、レヴィにやらせるとあれだからな――――――

「で、何故我がやらねばならんのだ！」

「まあまあ」

だって一番適任だもん。

プンプンと怒ってるディアーチェだが、真面目に雪かきをしている。

何だかんだいってやるんだね。

ふと視線を下にずらすとレヴィが雪だるまを作っていた。

そーいえば俺も前世でよく作ったな～まあ、十年以上前の事なので覚えてるわけがございませんが。

とりあえずスコップを使って庭に雪をポイっとな。

ポポポーン

なんか違う。

そろそろいいかなー。

「ディアーチェ～そろそろ終わりにするぞ～」

「ふん、やっとか」

ごくろーさん。

あ、滑りやすいから気をつけてね。

「のわっ！？」

ほら言わんこっちゃない。

とりあえず屋根の上で滑ったディアーチェの腕を掴むが、

「うわっと！？」

自分も滑ってしまっては意味がない。

庭に落ちる前に俺はディアーチェを引き寄せて、抱くような姿勢になった。

「なっ！！？？」

ディアーチェは抱き寄せられて驚くがルインはそれどころではない。

ルインはディアーチェを庇いつつそのまま庭に落ちた。

ボフン！

「おわ！？なんだ？」

レヴィが大きな音がしたので向いてみると、ルインとディアーチェが埋もれていた。

「だ、大丈夫！？」

レヴィは急いで駆け寄る。

「つつつ……雪がクッション代わりになってくれて良かった……」

どうやら無事なようで。

ルインはそのまま立ち上がり、ディアーチェを立たせたが何故がディアーチェはボーっとしている

「おーいどうかしたかー？」

「はっ！？」

目の前で手を振っているルインに気づいた。

「何でもないわ！この阿呆目が！」

そう言うと、ズカズカと立ち去ってしまった。

（ええい！何だ？この胸の高鳴りは？特にあ奴に抱かれたときに……）

そんな事を考えながら立ち去ってる事をルイン達は知らない。

「ふぇっくしゅ！」

「おお？風邪でも引いた？」

「さー？」

俺が風邪ひくなんてめずらしいなー。

「ルイン、レヴィ、夕飯が出来ました」

「ほんと！？」

目をキラキラさせてます。まあ、ふつーにおいしいからね。

「その前にディアーチェを呼んできてください」

「分かった！」

レヴィはそのままディアーチェが立ち去った方向に行った。

今日は何かな～

雪かき（後書き）

フラグっぽいの立ったｗｗ

マテリアル魔改造したけど後悔はしてない

風邪ひいた（前書き）

ディアーチェ成分補給話？

なんつて

風邪ひいた

「ゴホッ！ゴホッ！」

どもルインです。

現在、絶賛風邪引きです。ハイ。

あーやっぱ昨日雪に埋もれたのがまずかったかな～。

風邪引くとつらいよねー。特に咳しまくると何か筋肉痛になるし。

何？お前チートだろ？なわけないじゃん。

確かに俺はある有名な人物と同じ？ではないけど……ともかくその血をひいてるけどそれ以外はごく普通なんだよ？

魔法だって最初からバンバン使えたわけじゃないし、身体能力だってあれは訓練の賜物だよ。

そりゃ、まあ？技術はチートだけども俺が作ったわけでもないしー。

いや待てよ、その気になれば人造人間だって……。

マルチタスクも結構できるけど…。

はっ！？話がズレとる！

とりあえず俺は今、布団の中に入ってぬくぬくしてんだよ。

あー暖かい。

そんなことを考えていること戸を開ける音がしたのでそちらの方を見るといつものように王様気質ではなく、か弱い女の子みたいな感じになってるディアーチェがいた。

「ルイン……起きてるか…？」

こちらの方を見て静かに言う。とりあえず俺は起きているというサインを出す。

ディアーチェは戸をピシャリと閉め、俺の布団の横にそそそそっと座った。

……何て言うか……いつもと違う。

何かあったの？

「どうかしたのか…？」

「いや……その…」

何か言いづらそうみたいだ。関係ないけどモジモジしてて可愛い。
「もしかして…俺が風邪引いたことを自分のせいだと思ってるのか？」
「うっ！」
あ、苦い顔した。図星かー。
心当たりがあると言ったらそれくらいだもんねー。
「気にすんなって」
「いやしかしだな……」
頑固だなーそんなに頑固なら…
「じゃ、看病してくれ」
「ハァ！？」
俺の看病してくれ発言に驚愕した顔をするディアーチェ。
「我が看病など……！」
「じいーーーー」
無言で俺はディアーチェを見る。たじたじしてる姿が可愛い。
でも俺は見るのをやめない。

「いやしかし……」

「じいーーーーー」

「うっ……」

「じーーーー」

「分かった！我がやればいいのだろう！！」

観念したみたいだなニヤニヤ。

美女に看病されるのはこの上なくうれしい。

言っといてあれなんだけど少し恥ずかしい。

看病されるのは普通にうれしかった。

うん、うれしかったね。

ただ、

「あ…あ～ん……／／／」

「え…ちょ……／／」

なんでこうなったんだろう。

ディアーチェがお粥を作ってくれのはよかったんだが、食べさせようとしてきたのだ。

は、恥ずかしい／／

「そ、それくらい自分でできるって」

「う、うるさい！我に口出しするでない！というかルイン！何顔を赤くしておるのだ！」

ほっとけ！っていうかお前も十分赤いじゃねーか！

「いいからさっさと食べんか！」

わっーたよ！食べればいんだろ食べれば！

パクッ

「……」

「ど…どうだ？」

おいしい…けど恥ずかしい。

「うん…美味しい」

「ふ、ふん！我は王だ！それ位出来て当たり前だ！」

……ツンデレ？

余談だがレヴィがネギを持ってきて尻に刺そうとしてきた。

風邪ひいた（後書き）

可愛い。

次はしゅてるんにしょうかな。

どんな話にしようかな。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2559ba/

失われた地からの転生者

2012年1月14日02時51分発行